

和歌山との出会い

鞠 暁丹
交換留学生 中国

九月二十六日、忘れがたい一日でした。

午後三時ごろ、飛行機は関西国際空港に着陸しました。日本に向かう飛行機の中での気持ちは今までもよく覚えています。緊張感と期待が交じる瞬間、このチャンスを提供してくださった学校への感謝の心と、新しい生活と戦うチャレンジの心で、どうしても落ち着くことができませんでした。電車に乗ってようやく和歌山に着きました。真っ青な空、新鮮な空気、きれいな街並み、日本的な雰囲気の家、こんこんという電車の音……私はこの静かな都市の中で1年の留学生生活を始めました。

和歌山との出会いは秋でした。初めて和歌山に来た時には何も知らない私に親切に接してくれたのは、留学生寮である国際交流会館一階で出会った寮長の張さんでした。私たちに会館生活のルールを紹介してくれたり、歓迎パーティーを開いてくれたり、学校までの道を案内してくれたりしました。そのおかげで、難しいと思っていた留学生活は順調に進みました。秋と言えば、目の前に出てくる画像は紅葉といっぱいの落ち葉です。もちろん和歌山城で見ていた紅葉の景色もすごく綺麗でした。しかし、初めて日本に来た私にとって最初に体験したかった日本の独特な文化は神社でした。ですから、最初の一週間も経たないうちに友達と一緒にあちこちの五個くらいの神社に行ってきました。真摯な心を持って神様に祈りました。有意義な楽しい一年を過ごせるように、と。ただし、この秋は見慣れない環境への好奇心だけではなく、自分の心も矛盾でした。中国で精一杯頑張っているクラスの姿を見て心ももやもやしました。自分も頑張らなければなりません。



12月に入ると、冬の時期です。一番印象に残ったのは留学生みんなで行ったことです。和歌山の名物と言えば、みかんと梅干しです。ボランティア団体のWINコンコードの先生たちのおかげで、農家で八朔を摘んで鍋パーティーを開いていただきました。3人一組がかごを1つ持って八朔の木と戦いました。黄色のかごは朝の露に付いた八朔に次々と埋められました。収穫が終わった後、先生たちは車のトランクから食べ物を持ち出してくださいました。手作りの柿のジャムとスープをいただきながら話しました。秋の柿のジャムと冬にぴったりの温かいスープ、季節感いっぱいで心も温かく包まれました。疲れも一瞬で消えました。残念ながら、去年の冬は例年より暖かくて和歌山の雪の風景は見られませんでした。雪で覆われた和歌山はどのような様子でしょうか。この一年間は見られませんでした。将来いつか和歌山と再会した時、きっと見られるでしょ



う。きつときれいで愛に溢れて静かな町だと思います。

別れは三月で、新しい出会いは四月です。成長するのもこの時期です。もう半年日本にいたので、何でも慣れてきました。私はそう信じていました。三月に半数以上の交換留学生は交流が終わって帰国しました。最も名残惜しいのは親友の帰国です。それに加えて、バイト先でいつもお世話になっていたお母さんも体の具合でバイトを辞めてしまいました。完全に先が見えない状態でした。その時は、店長も随分困ったと思います。でも、店の常連さんは「頑張って！あなたは絶対店長の力になるぞ」と言ってくれました。みなさんもそのような経験があると思いますが、ピンチに陥った時は他人のシンプルな一言は凄く力になります。支えてくれる人がいるこそ、自分も改めて元気を出さないと、と思えるのです。先日日本に来た留学生も、もう二ヶ月間日本にいます。私も新しい友達出来ましたし、楽しい毎日を送っています。

初めて日本についた時からもうすぐ一年になるのに、まだ3ヶ月くらいしか経っていないように感じます。和歌山はきれいな景色に恵まれていますし、人々も親切ですし。和歌山で留学する時の毎日毎日が大学生活の中で何よりも豊かで、大切なメモリーだと思います。また、いつかに和歌山と会いたいと思います。